多様なるマイノリティの交差――東山彰良『僕が殺した人と僕を殺した人』論The Intersection of Various Minority Groups: A Discussion on Akira Higashiyama’s “The one whom I killed and the one who killed me”

XIE, HuiZhen　　文藻外語大学, Taiwan

Topics: Coexistence, Human Rights, Diversity, Growth

Keywords: マイノリティ、物語論、殺人、死刑問題、包摂と排除

第153回直木賞を受賞した台湾籍の東山彰良（本名王震緒）は、その後、第11回中央公論文芸賞の受賞作『罪の終わり』（2016.5）での、極限状態における食人問題の議論を展開した。さらにその議論を受け継ぎ、新作『僕が殺した人と僕を殺した人』（2017.5、以下新作）では、殺人と死刑問題を描いていた。舞台は直木賞受賞作『流』の葉一族と時空間とは隣接している1984年の台湾と2015年のアメリカで、戦後、国民党と共に台湾に渡ってきた外省人少年四人の友情の物語である。

登場人物が行動を共にするゆえ、視点の近似性により、視点人物「僕」の重層性と曖昧性、また、叙述の時間軸を何度も前後にぶれるプロットなどの技法、こうしたサスペンスとしての謎解けの仕組みを、小論ではまず物語論によって、解明する。それに基づいて、いったいタイトルにある「僕」はいったい誰か、そして「殺した」とはどういう意味かが興味深くなってくる。上記の疑問を、同性愛者、移民、障害者の生存状態の人権の観点から、社会からのダイナミックな「包摂と排除」から相対的な自立性を見出そうとする少年たちの葛藤と重ねて究明する。